

PEACE GOURD



9条の会・養老
会報、第42号
2023年7月27日
(部内資料)

”ピース・ガード” 「平和の瓢箪」

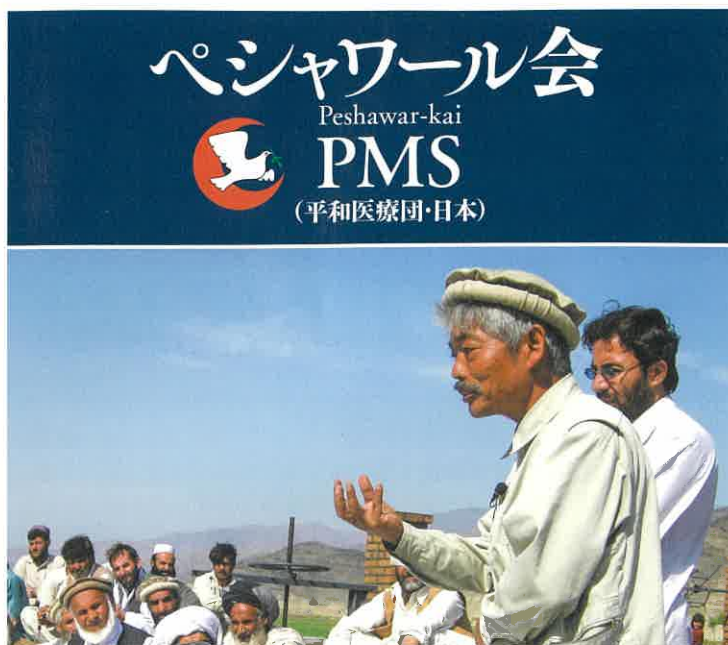
中村哲さんの上映会に行ってきました

レポート 9条の会・養老会員 田口ようこ

6月25日江南市民文化会館で、パキスタンとアフガニスタンで35年間人道支援に尽力した哲さんの生き様を追ったドキュメンタリー映画「荒野に希望の灯をともし」を観てきました。私が特に印象に残った部分を紹介します。

◎中村哲医師と共に歩む◎

・医師として戦時下のアフガニスタンに渡り医療だけではなく、大干ばつで乾いた大地に川の水を引き込む大事業の先頭に立っていた中村医師。「100の診療所より一本の用水路を」この言葉を心に刻み、自らショベルカーに乗り、用水路建設に従事し続けた。2019年12月4日凶弾に倒れこの世を去った後も、築きあげた9つの用水路により、1万6千ヘクタールが緑化され、アフガニスタンで暮らす65万人もの自給自足を支えている。



ペシャワール会公式パンフレットより

・通常、医療ボランティアであれば、治療して薬を配って終わってしまうところを、中村医師はそこで終わらなかった。飲める水、傷口につける綺麗な水があれば、ここの人達は生きて行ける。水が緑を生み、作物を作り、家族揃ってご飯が食べられる。お金のために兵隊に行かなくても良い。もちろん、栄養状態がよくなれば病気もなくなる。そんな思いから無謀とも思われる用水路建設を始めた。

・アメリカのヘリコプターが上空を飛ぶ中でも、人々が生きるために水を引くための作業は続けられた。「彼らは殺すために空を飛び、我々は生きるために地面を掘る」⇒2頁へ



町内高田(島田地内)



戦後は続くよ どこまでも



⇒1頁より続く

・死にかけて幼児を抱いた若い母親が診療所に来る姿が目立って増えた。干ばつの犠牲者の多くが幼児であった。「餓死」とは空腹で死ぬのではない。食べ物不足で栄養失調になり、抵抗力が落ちる。そこに汚水を口にして下痢症などの腸管感染症にかかり、簡単に落命する。若い母親が死にかけて我が子を胸に抱き、時には何日もかけて歩き、診療所を目指した。生きてたどり着いても、外来で列をなして待つ間に我が子が胸の中で死亡、途方に暮れる母親の姿は珍しくなかった。その姿は、およそ子どもを持つ親なら涙を誘わずにはおれぬものであった。

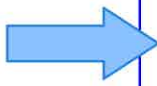
・中村医師の10歳の次男が悪性の脳腫瘍にかかり、死期が近かった。可愛い盛りである。親の情として「代わりに命をくれてやっても」とさえ思う。少しでも遊びに連れて行き、楽しい思いをさせたかった。数ヶ月後、次男は家族に見守られながら息を引き取った。空爆と飢餓で犠牲になった子の親たちの気持ちがいつそう分かるようになった。

紹介したいエピソードは、まだまだ一杯あり書ききれません。「観念の戦いは不毛である。平和は戦争以上に積極的な力ではなければならぬ。」「裏切られても裏切り返さない。誠実さこそが、人々の心に触れる。」「暴力に対して暴力を持って報いるのは我々のやり方ではない。平和が日本の国是である。我々は建設的な人道支援を忍耐を持って継続する。」「平和とは理念ではなく現実の力なのだ。」等、哲さんが遺した数々の言葉は、身をもって実行したからこそ私たちの心に響きます。

「困っている人がいたら手を差し伸べる。それは普通のことです。」と哲さんは言いました。哲さんの活動を支えている国内外のボランティアの方々も共通した考えだと思います。私も微力ながらこれからも支援を続けていきたいと思っています。

右の上映チケット、前売り¥1,200は、世話人 問山（西濃民主商工会）でも若干扱います。ご希望の方は電話をお願いします。

090-2348-0719



ペシャワール会事務局

〒810-0003 福岡市中央区春吉1-16-8 VEGA 天神南 601号
 電話 092-731-2372 / FAX 092-731-2373
 Eメール peshawar@kkh.biglobe.ne.jp
 ホームページ http://www.peshawar-pms.com
 【ペシャワール会会長・PMS 総院長】村上 優



武力で平和は守れない

医師 中村哲 現地活動35年の軌跡

これは「生きるための」戦いだ。

アフガニスタンとパキスタンで、病や貧困に苦しむ人々に寄り添い戦った男、医師・中村哲。戦火の中で病を治し、井戸を掘り、用水路を建設してきた。なぜ医師が井戸を掘り、用水路を建設したのか？ その答えは、命を懸けて中村の生き様の中にある。私たちはこの映画で中村が生きた、その軌跡をたどることになる。



「彼らは殺すために空を飛び、

我々は生きるために地面を掘る。」—中村哲

中村の誠実な人柄が信頼され、医療支援が順調に進んで、2006年、思いもよらぬ事態に直面し、中村の運命は大きく変わる。それが「大干ばつ」だ。飢えと暑さで人々は命を落し、農業は壊滅、医療で人々を支えるのが限界だった。その時、中村は誰も想像しなかった決断をする。用水路の建設だ。大河クナルから水を引き、乾いた大地を潤わせたというのだ。しかし、医師にそんな大工事などできるのか？ 戦火の中で、無謀とも言われた挑戦が始まった。

「ここには、天の恵みの実感、誰もが共有できる希望、

そして飾りのないむきだし生死がある。」—中村哲

専門家がいわくま始まった前代未聞の大工事は、苦難の連続だった。数々の技術トラブル、アフガン空爆、息子の死…。中村はそれらの困難を一つ一つ乗り越え、7年の歳月をかけた用水路は完成。用水路が運ぶ水で、荒野は広大な緑の大地へと変貌し、いま5万人の命が支えられている。そして、

2019年12月、さらなる用水路建設に邁進する最中、中村は何者かの凶弾で命を奪われた。その報にアフガニスタンは悲しみに沈み、ニューヨークタイムズ、BBCなどが悲報を世界に伝えた。あれから2年半、日本ではその生き方が10年や高校の教科書で取り上げられ、母校の九州大学はその思想と実践を研究し始めた。中村の生き様は静かに語り継がれ、輝きを消しながら人々を協賛し続けるだろう。そして用水路はこれからもアフガン人の命を支え続けていくだろう。

戦火のアフガニスタンで21年間継続的に記録した映像から、これまでテレビで伝えてきた内容に未公開映像と現地最新映像を加え劇場版としてリメイク。混濁とする時代のなかで、より輝きを増す中村哲の生きざまを追ったドキュメンタリー！



—【劇場版】について—
 この映画は、2022年に完成した作品で【DVD版】とは異なって、2019年中村哲さんが凶弾に倒られた後の、アフガニスタンの状況を描いています。

日時 2023年8月30日(水)

時間 ①9:30 ②11:30 ③13:30 (3回上映)

会場 ぎふメディアコスモスみんなのホール

入場料◆一般(前売券)1200円(当日券1500円)全席自由席
 (※満席の場合は入場を制限させていただきます。)

〈主催・お問合せ〉シネマ ソラ | 2階6号の会館会館時間: 平日 10時~17時まで |
 Tel: 090-8194-4804 mail: cinema_sora_0416@yahoo.co.jp

【チケット購入方法】

●チケットぴあ Pコード553094 (セブンイレブンで購入できます)
 ●岐阜市文化センター ☎058-262-6200
 ●岐阜市会館 ☎058-262-8111
 ●お電話、ファックスでのご購入の場合、
 お電話は090-8194-4804番号までご連絡下さい
 ファックスは、お名前、ご住所、お電話番号、チケット枚数を記載のうえ
 075-320-2699番号まで送信ください。
 後日、郵便番号とチケットをお送りしますので、最寄りの郵便局にてお支払いください。

新美南吉の生きた時代～文学と戦争と平和～《ピースあいち》に行きました！

報告：佐竹 哲（世話人）

新美南吉は1913(大正2)年7月、愛知県知多郡半田町（現在の半田市）に生まれ、幼くして母を亡くし、実母の実家に養子に出されました。青年期も病気がちで1943(昭和18)年に29歳でこの世を去りました。短い生涯ながら、彼が残した文学作品は『ごん狐』、『手袋を買いに』等の名作が多く、日本の代表的な児童文学者です。私も新美南吉の童話は子供の頃より大好きで、大人になってからも作品の奥深さを感じ、何度も読み返してきました。しかし、南吉の生きた時代の大半は、戦時下だったのです。多くの作品は戦争色のないものばかりで、南吉が戦争をどのように感じ、苦悩していたかは、私は想像したことがありませんでした。



新美南吉(記念館HPより)

この夏、名古屋市名東区のピースあいちで、「新美南吉の生きた時代～文学と戦争と平和」という企画展が9月9日まで開催されています。私は今月19日に家族と一緒に観覧することができました。展示品の撮影は禁止されているので、メモをした南吉の日記を紹介します。

「日本の子供達が十人が十人まで兵隊好きであるということ、日本の多数の人が殆どミリタリストであるということは、明治の頃の教育、又は国家思想、ミリタリズム宣伝の結果だと思われる。」(1938年11月18日)

「万歳三唱の音が聞えた。みんな日本の良い国であることを納得し、支那はやつつけられて^{しな}いること、米国も英国も恐るるに足りないことを納得し、ついに会を^{おわり}終をつげたのだ。現代日本の風景、何という暗い、非文化的な。」(1940年2月15日)

日記からは、当時の軍国思想に対する南吉の強い批判と憂いを感じられます。

また、『張紅倫』という南吉の童話作品が紹介されていました。あらすじを記します。中国に駐留している日本部隊の青木少佐がある夜中、見まわり中に古井戸に落ちてしまい、助けを呼んでも誰もいません。死を覚悟し、気を失ったところを中国人の張さんに助け出されます。張さんの家は貧しい農家で十三、四歳の息子・張紅倫と二人暮らしでした。青木少佐の体が回復するまで四、五日、お世話をしてくれました。しかし、他の村人が、少佐をロシア兵に売ろうしたので張さんはあわてて少佐を逃がしました。少佐は、張家を出ていく際、お礼に張紅倫に自分の懐中時計を渡しました。それから十年後、戦争が終わって青木少佐は日本に帰り、会社勤めになりました。ある日、青年の中国人が会社の事務所に文具を売りに来ました。少佐は青年から万年筆を買い、その際に青年の手元の懐中時計を見つけました。少佐は青年に「きみ、張紅倫というんじゃないかい」と尋ねましたが、青年は否定しました。後に一通の手紙が届きます。手紙には、青木少佐が軍人の身で敵国の中国人に助けられたことが他の日本人に知られると少佐に都合が悪くなると思い、張紅倫であることを言わなかったこと、明日、中国に帰ることが書かれていました。この童話は戦時中の作品です。この中国人と日本人の素敵な出会いの物語には、南吉の平和への願いが込められています。

第65回岐阜県母親大会から、前川喜平さんの講演を聞いて

西濃民商だより第1028号の掲載分から抜粋しました。

去る6月25日(日)飛騨古川で開かれた第65回岐阜県母親大会に参加してきました。会場は飛騨市文化交流センター。諸般の事情で午後からの全体会への参加になりましたが、岐商連婦人部でお見掛けする仲間の皆さんともお会いできました。



前川喜平 氏

★全体会、前川喜平氏の講演

前川喜平さんは現代教育行政研究会代表という肩書ですが、前文科省事務次官といったほうが良くわかると思います。

前川さんは官僚としていくつかの内閣に仕えてきたが、安倍内閣あたりから自民党内閣がおかしくなってしまったとの嘆きを交えながら憲法、教育、家族、平和…など多岐にわたるお話をされました。以下、主な内容です。

▼安倍さんは公務員を、公僕から内閣の下僕に変えてしまった。

▼2015年9月18日、私(前川)は現役文科官僚(審議官)でありながら仕事を終えた後、こっそりと安保法制反対のデモに参加した。でないとい生悔いが残ると思った。

▼今の自民党内閣には安倍さんの祖父、岸信介氏のDNAが息を吹き返している。

▼個人より国家が大事、国家の単位は家族、家族の長はお父様、日本国は一つの家族、日本国のお父様は天皇。こんな世界観が多く国会議員を支配している。

▼市民運動では演説調、断定調の言い回しは禁句。共感に基づく軽い疑問形で語りかけよう。

報告者：9条の会・養老会員 問山光恵



◇今後の活動予定と各団体のイベント予定◇

★原爆と人間展 ～2023 平和を語り継ぐ夏～

日時：7月29日(土)・30日(日) 9時～15時

場所：スイトピアセンター3F展示室

主催：岐阜県被爆者の会

→別紙チラシあり

★ぎふ平和美術展

日時：8月10日(木)～15日(木) 10時～16時

場所：ぎふメディアコスモス「みんなのギャラリー」

主催：岐阜平和美術展実行委員会 Tel.0575-28-5177 (伊藤薫 方)



編集後記

暑中お見舞い申し上げます。

今年もまた暑さ厳しき季節を迎えいかがお過ごしでしょうか。これから夏本番、くれぐれもお体大切に、無理をされませぬようお願い申し上げます。

さて7月の世話人会では、コロナ再拡大の情報の中、実出席を伴う企画をどうしよう?との思案のまま具体的な結論には至らず、次回までに何かを考えて来ようの段階で留まっています。本会報では▼映画「荒野に希望の灯をともし」上映会の報告▼岐阜県母親大会の報告▼ピースあいち「戦争を考える企画展」の報告の三題としました。

世話人 問山尚義

連絡先

「9条の会・養老」世話人

090-9183-0444 中野一美(代表)

090-9894-0444 佐竹 哲

090-2348-0719 問山尚義

090-8733-0090 禿 憲正

fax(問山)

0584-71-8746

E-mail(問山)

toiyama@ninus.ocn.ne.jp